

『月あかりの下で ある定時制高校の記憶』の太田直子監督最新作！

まなぶ

通信制中学

60年の空白を越えて



戦後をひたむきに生きた人たちが、人生の終盤につかんだ青春

撮影・監督・語り：太田直子

プロデューサー：田野稔

製作著作：グループ現代

助成：文化庁芸術文化振興費補助金

(2016年/カラー/BD/92分/日本/ドキュメンタリー)

<http://www.film-manabu.com/>

【お問い合わせ先】株式会社グループ現代（担当：川井田/黒川/上清水）

TEL：03-3341-2863（平日 11:00-18:00） 090-5495-2580（川井田） FAX：03-3341-2874

MAIL：gg@film-manabu.com

〒160-0022 東京都新宿区新宿 2-3-15 大橋御苑ビル 7F

2017年3月25日（土）より新宿 K' s cinema にて
連日 10:30 モーニングロードショー

学ぶことは楽しいですよ。知らないことだらけですもん。
知らないことだらけってことに
今まで気づかずにきたんですよ、70過ぎまで。

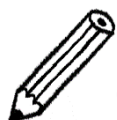


イントロダクション

東京都千代田区立神田一橋中学校通信教育課程。

大都会の片隅に、戦後の混乱期に中学校の義務教育を受けられなかった高齢者たちが、青春を取り戻しにくる学び舎がある。

人生の終盤を迎えてなお、人はなぜ学ぼうとするのか。前作『月あかりの下で ある定時制高校の記憶』で高い評価を得た太田直子監督が、その意味を探して5年の歳月を追ったドキュメンタリー。



あらすじ

映画の舞台は東京都千代田区立神田一橋中学校通信教育課程。

毎月2回の休日、戦後、中学校で義務教育を受けられなかった高齢の生徒たちが、面接授業に通ってくる。60年ぶりの学校生活にとまどいながらも、学ぶ喜びにみちた表情の生徒たち。教えるのは生徒の子や孫の年齢の先生たちだが、生徒たちの人生経験を踏まえた、あたたかいまなざしにみちた授業が展開される。

休み時間には、まるで十代の少女に戻ったかのように互いの家庭の事情を語りあい、笑いあう。そんな学校生活の日常に2009年から2014年までの5年間カメラを向けたのが、この作品である。

学校にたどりついた背景は一人一人それぞれ異なる。映画は6人の生徒の背景にもよりそう。戦争で大黒柱の父を亡くし、働かざるをえなかった人、戦時下、空襲で焼け出され、満足な教育が受けられなかった人。戦争は子どもたちから教育という大切な宝を奪った。そして、高度経済成長に向かう日本社会の片隅にも、貧困のため中学校に通えず、働いていた子どもたちがいた。自ら選択できなかつた人生の終盤に、ようやくたどりついた学び舎。先生がいて、同級生がいて、学びの前に生徒たちは青春時代に帰る。

夫や妻の介護、自身の病気を乗り越え、中学で学んだ基礎をもとに高校進学をめざす生徒も現れる。

◆通信制中学（中学校通信教育課程）とは？

昭和22年(1947)新制義務教育制度の開始にともない、戦中戦後の混乱期、中学校3年間の義務教育が未修了となった人たちのために、昭和23年(1948)に全国の中学や高校に設置された。学校教育法105条に、「①中学校は、当分の間、尋常小学校卒業業者及び国民学校初等科修了者に対して、通信による教育を行うことができる」とある。当初、日本全国に80校を越えたが、現存するのは映画の舞台、東京都千代田区神田一橋中学校と、大阪府天王寺市立天王寺中学校のみである。全教科履修でき卒業証書を出しているのは、神田一橋中学校ただ一つである。



監督のことば

この作品は、東京都千代田区神田一橋中学校通信教育課程の面接授業に通う、高齢の生徒さんたちの姿を、2009年から2014年まで記録したものです。

公立中学校の通信制課程は、戦中・戦後の混乱期に義務教育を受けられなかった人たちのためにつくられました。いま全国には神田一橋中学を含め、二校だけ残っています。

すでに人生の経験を積まれ、母となり祖母となった人たちが何を求めて、なぜ学校に通うのか。何も知らなかった私は、そんな問いを抱えながらカメラを持ち、学校に足を運びました。そして私自身が、生徒の皆さんから学んだ「答え」をまとめたのが、今回の映画です。

私たちがあたりまえのように受けてきた中学校までの義務教育が、人が社会の中で生きていくためにいかに必要なものであるかということ、その機会を奪われた人たちの姿から、改めて知りました。知識や考える力といった勉強に関わるだけでなく、ホームルームや部活動、学校行事を通してのクラスメイトとのぶつかり合いや先生たちとのやりとりは、人との付き合い方を教えてくれる大切な場でした。

そうした経験を経てこなかった人たちが、社会の中に放り出されて生きていくのは想像を絶するようなことがあったであろうと思います。だから、80代になっても青春を取り戻しに来るのです。でも、悲しいかな、現実には決して取り戻せない。けれど、心の中はいつまでも若くいられるんですね。「学校にいと、青春になっちゃうの」という峯永さんの言葉が、それを表しています。本当に、カメラを向けながら、けらけら笑うおばあさんたちが、そのまま十代の少女のようにみえることがありました。自分の子どものような年齢の先生に注意されて小さくなったり。

そんな姿をみてあらためて思うのは、繰り返しになりますが、「学校」という場の大切さです。既存の教育制度に則ったきちんとした学校でなくても、教える人がいて、学ぶ人たちがいて、学ぶ何かがあつて。そこでは、学ぶ人はみな自分なりに、自分を磨くためにだけに学ぶ。その場所の意味を通過していた頃は感じませんでしたけど、「学校」って自分を育てるために行く場所なんだ、と。

この映画が、みてくれた方、それぞれの学びの場に思いを巡らせることにつながり、またいまだに義務教育を受ける権利を奪われたままの人たちや、学び直しを必要とする人たちに、この国が、社会の中で豊かに生きるための「学校」を提供する力になってくれたらいいなと思っています。



太田直子（おおた・なおこ）

1964年生まれ。高校非常勤講師、書籍編集などの仕事を経て映像の仕事に携わる。

前作の『月あかりの下で ある定時制高校の記憶』（2010）は平成22年度文化庁映画賞ほか各賞を受賞し、高い評価を得ている。



「学ぶとは、どういうことか」を根底から問いかける映画

見城慶和（えんぴつの会・元夜間中学教師・山田洋次監督映画『学校』主人公モデル）

私は長いこと夜間中学校に勤務してきたので、通信制の中学校が東京の一橋中学校にあるということは知っていました。設置に関する法的な規定のない夜間中学校とちがって、通信制中学は学校教育法の105条に基づいて運営されているということも知ってはいました。でもそこで、どのような人たちが、どのように学んでいるかというようなことは全く知りませんでした。そんな私にとって、この映画との出会いは感動の一言につきるものでした。

まず驚かされたのは、映画の中に私が知っている宮城正吉さんが生徒さんの一人として登場していたことでした。もう十五年も前になりますが、定年後の私が嘱託教員として勤務していた墨田区立文花中学校の夜間学級で出会ったのが、私といくつも年の変わらない宮城さんでした。夜間中学に入学したものの、残業仕事などで、宮城さんの夜間中学校生活は長くは続かなかったのです。

その宮城さんが、七十歳もとうに超えた今、月に二回ほど昼の学校が休みの土日に行われる一橋中学のスクーリングで学んでいたのです。通信制ですから、こうした授業を除けば、あとは自分でテキストを手掛かりにレポートを書き、それを提出して学習を進めます。ここに集う学習者は勿論のことですが、先生たちも授業にかける意気込みや熱意は大変なものがあります。国語、英語、理科、社会、体育など映画に出てくる授業がどれも惚れ惚れするほど素敵です。先生たちの学習者に対する尊敬の念が伝わり、生徒と教師が教科の内容を深く共感していく様子なども心地よく伝わってきます。

学校風景から離れると、映画は一人一人の学習者の姿を追います。なぜ学齢期に中学校へ行けなかったのか、またどうしてこの年齢になっても学びたいのか、仲間や家族とのかかわりの中でどう学びを求め続けてきたのか、などを、それぞれの生活場面の中で語ります。語られる言葉は勿論ですが、語る顔や全身の表情にも強く心を打たれます。この映画は「学ぶとは、どういうことか」、「学校とは、どういう場であるべきか」を根底から問いかけています。

いま国会では、戦争や貧困、不登校などの事情で義務教育を十分に受けられなかった人たちの学びを拡充する「教育機会拡充法案」が審議されています。太田直子監督が、定時制高校の教育に光を当てた映画『月あかりの下である定時制高校の記憶』（2010年）に続いて、この度、ドキュメンタリー映画『まなぶ 通信制中学 60年の空白を越えて』を世に問う意義は、計り知れなく大きなものがあると確信します。

※夜間中学校の同僚であった澤井留里さんから、この映画に寄せる素敵な感想メールが届いたので、それを下敷きにこの一文を書かせていただきました。



試写会アンケートより

“学ぶことが 世界をつくる”ということを実感させてくれる素晴らしい映画でした。何歳になっても、世界が大きく広がることのすばらしさ、それをつくり出せる学校という空間とそこにつながる人々…ぜひ、多くの人々に見ていただきたいです。(男性 60代 教育関係者)

学ぶという事の意味を深く考えさせられました。映画をみて、普段、「教える」という仕事をしているのですが、学ぶ動機の差はあれど、学ぶ側の心の中に、何かうまれてくるような教育は、いくつになっても、可能なのだと思いました。積極的に、そのような方の受け入れをしたいと思います。(男性 40代 教育関係者)

自分の父・母と同じ世代の方たちだったこともあり、様々な思いがこみ上げてきました。監督と出演者の距離が徐々に近くなっていくところが、時を重ね、足を運びつづけた大きな成果だと思います。(男性 40代 メディア関係者)

行くのがあたりまえと思っていた学校、するのも当然と思っていた勉強。それがそうではなかったことに驚きました。それぞれにいろいろな事情を抱えていらっしゃいましたが、学んでいらっしゃる時の笑顔が輝いていました。私自身はすでに義務教育も終え、その後も続いて大学まで行きましたが、もっと大切に過ごしておけばよかったと、この映画を見て思っております。現代の子どもたちにも、この映画を見る機会があるといいなあと思います。(女性 50代)

学ぶことの大切さ、しみじみ思っております。夜間中学をおえたあるいは、そこにも行けない、様々な事情で学びに加われない生徒さん、人々のために、強いメッセージを伝えられる映画でした。(女性 60代 教育関係者)

深かったです。子供に学ぶことの意味を問われて自分ではわかってるつもりでも納得のいく答えがいつもできず、この映画で答えの一つをもらえました。でも、 $1+1=2$ のようなものではないところが“学び”の深いところですね。(男性 50代 会社員)

題名のとおり「まなぶ」ことの原点を改めて考えさせられた映画でした。立場は違えど、今でもとある分野の勉強をしています。なまけそうな自身を励ましていただいた気がします (男性 50代)

すばらしい。感動しました。まなぶことは人間らしく生きることです (男性 60代)

通信制を初めて知りました。通信制夜間、定時制、向学心に燃え、生活を犠牲にしても「学校へ行きたい」「学びたい」この心を決して消してはなりません。子どもたち、青年たちは国の宝です。(男性 87才 教育関係者)

今、不登校の子どもが増えていて、学校なんて行かなくていいという風潮になっていますが、〈まなぶ〉ことの素晴らしさ、その機会を奪ってはならないと思います。仲間がいて先生がいる。それが一人で家で勉強することと明らかにちがうのだということが伝わってきました。(女性 50代)



いろいろな事情があって中学校に行けなかった人々が数 10 年振りに中学校に行って一生懸命勉強する姿はすばらしかったです。人は何才になっても勉強ですね。一生勉強だと思いました。(男性 50 代)

30 年以上、中学校の教員をしています。学校教育を取りまく環境は近年多様をきわめ、その対応に追われる毎日です。本来の教育の意義や目的をその雑事の中で見いだせず、見失いかけていました。「学ぶことは楽しいじゃない!!だって知らないことだらけだもの」ということばに感動しました。今後の仕事(私の)もがんばれると思いました。教育することの勇気をもらいました。皆々に見てもらいたいと思います。(女性 50 代)

学ぶこと、教育を受けられること、ということの尊さをこんなに感じたのは、初めてでした。この映画をより沢山の方に見ていただきたいと強く思いました。(男性 50 代)

戦争で父を失ったり、生活を支えるために奉公に出されたりという大変な人生を経て、一橋中学の通信制に辿りついた人々の学びの姿に、心洗われる気持ちになりました。(男性 60 代)

通信制中学という学校があったことを、この映画ではじめて知りました。ここで学ぶ人達の気持ちは熱心で、朗らかで、一生懸命でした。私は自主夜間中学で学んでいますが、この映画はちがった意味でよかったと思います。よかったというのはこの通信制中学校では、4 教科以上もやっておられることです。

この学校では、1 年に 20 回ぐらい、学校に登校する日曜日は朝から夕方まで授業があり、(お昼のお弁当も楽しみ)全ての教科が学べるそうです。(課題を提出する「自宅学習」もあります)私が通う自主夜間中学でも、学んでいるけれど、指導者に限りがあって沢山学べません。もし、公立の中学校(夜間中学)が出来れば、なおやりがいができると思います。もっといろんな教科を勉強できるからです。(女性 自主夜間中学・学習者)

とても感動的な映画でした。涙あり、苦笑あり、現代人(社会)のかかえる様々な問題も含み、いろいろとかがえさせられました。やってきた仕事のこと、介護のこと、結婚相手のこと、病気になってしまったこと、小学校時代の思い出やふるさとのこと、37 歳で出征した父と別れた日のこと……。学生服にあこがれた日々のこと……。映像の中で語られるセリフ(語り)に合ったバック音楽(特にギター演奏)は何故か胸にジーンとききました。(昔見た映画「若者たち」の佐藤勝さんのバック音楽をふと連想しました) (男性 自主夜間中学・スタッフ)

69 歳の女性は、8 歳の時、お米とひきかえに奉公に出されたといっていたが、今時、こんなことがあるのかと非常にショックだった。私とほとんど同年齢だったので……。今日でも、子どもと貧困が大きな問題になっている。だからこそ、多様な「学びの場」が必要とされていると思う。この映画をとおして、学校に行くことが、その人の社会性を育てることを知った。自分は学校に行っている間は考えてもみななかったが……。(女性 教育関係者)

2017 年 11 月 16 日・18 日におこなわれた有料試写会でのアンケートより。



スタッフ

監督・撮影・編集・語り：太田直子

プロデューサー：田野稔

オンライン編集：佐藤伸一

整音：高木創（東京テレビセンター）

ポストプロダクション：東京テレビセンター

音楽：t & k プロジェクト

題字：宮城正吉

上映担当：川井田博幸 黒川通子 上清水温子

デザイン：仁木順平

Web制作：遠矢麻野

宣伝協力：見城慶和、関本保孝、澤井留里

製作著作・配給：グループ現代

(2016年/カラー/BD/92分/日本/ドキュメンタリー)

<http://www.film-manabu.com/>

ご協力いただいた方々

東京都千代田区立神田一橋中学校 通信教育課程の生徒・卒業生・教職員のみなさん

千代田区教育委員会

東京都立一橋高等学校通信教育課程

協力

東野真 戸沢冬樹 松本哲夫

西條美智枝 鈴木一平

映像提供

NHK

資料写真

一橋中学校通信教育課程創設30周年記念誌

野田市立福田第二小学校

藤井司

助成

文化庁文化芸術振興費補助金

お問い合わせ先

株式会社グループ現代（担当：川井田/黒川/上清水）

TEL：03-3341-2863（平日11:00-18:00） 090-5495-2580（川井田）

FAX：03-3341-2874

MAIL：gg@film-manabu.com

〒160-0022 東京都新宿区新宿2-3-15 大橋御苑ビル7F

2017年3月25日（土）より新宿K's cinemaにて連日10:30 モーニングロードショー

